

オルガノン要約 § 91～99

§ 91 本来の病的形態を真に徹底して理解するためには、薬に攪乱されていない状態の患者を診ること。可能なら断薬する。

§ 92 危険で一刻の猶予もない場合は、断薬して影響が消えるまで待つてはならない。そのときは薬の影響も含めた全体像をまとめ、それに合ったレメディーを使うこと。

§ 93 病気がある注目すべき出来事によって引き起こされたのであれば、本人や家族から慎重に聞き出すことができるだろう。

(注)話したくない理由の場合もあるだろうから、言い回しには機転を利かせること。

§ 94 患者の生活環境の中に病を維持させるものがないか考慮すること。

(注)女性の場合、特に月経に関して問診し忘れてはならない。その例。

§ 95 たとえ患者にとってありふれた症状だとしても厳密に調べなければならない。患者にはそれが病気と関係するとは思ってもらえないことがある。

§ 96 症状を誇張する患者もいる。

(注)これも特徴だということもできる。精神錯乱や仮病との分別が必要だが。

§ 97 逆に症状を曖昧に表現したり、重要視していない患者もいる。

§ 98 患者の言葉は絶対的に信頼できるものである。と同時にそれを受け取る側には高レベルの知覚力が要求される。

§ 99 急性の病気・症状は患者の記憶に鮮明に残っているので、それほど探求しなくても大部分話してくれる。